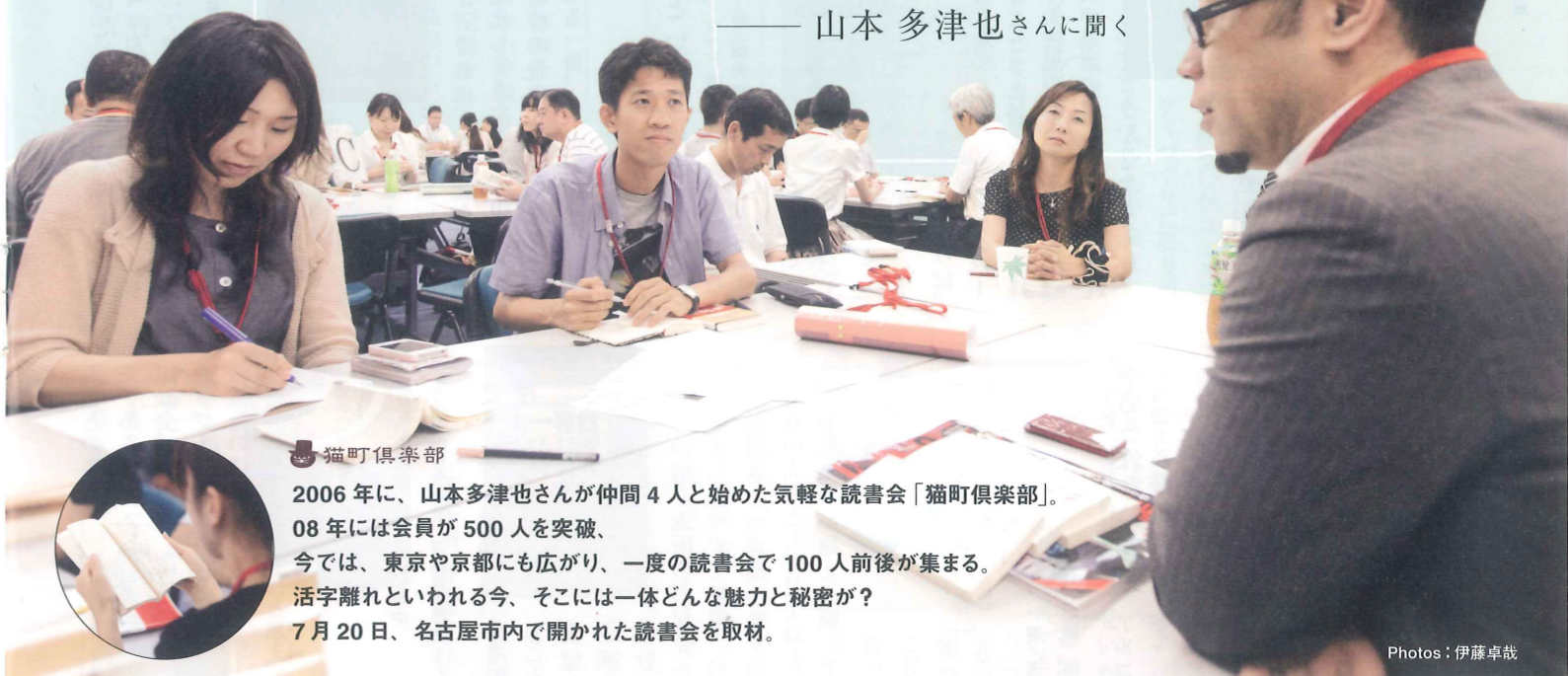


日本最大の読書会! 「猫町倶楽部」 語り合える仲間がいる読書コミュニティ

—— 山本多津也さんに聞く



Photos: 伊藤卓哉

猫町倶楽部

2006年に、山本多津也さんが仲間4人と始めた気軽な読書会「猫町倶楽部」。08年には会員が500人を突破、今では、東京や京都にも広がり、一度の読書会で100人前後が集まる。活字離れといわれる今、そこには一体どんな魅力と秘密が? 7月20日、名古屋市内で開かれた読書会取材。

思いっきり話したい。感動を言語化して語り合える人がいる。

びっしりと付箋が貼られた1冊の本をめくり、「私はこのページのこの一文にとっても共感しました」と一人の女性が口火を切った。すると向かいに座っていた人が「この発想は、僕の仕事のこの部分に活かそうな気がするんですよ」と続ける。また、ある人は「この論理展開がよくわからなかったのですが、みなさんはどう読みました?」と質問を投げかける。

1テーブルに約10人。男女比率はほぼ半々。会社帰りの人もいれば学生や主婦もいて、世代も20、60代と幅広い。そんな彼らの共通項はただ一つ。前もって指定された「課題本」を読了しているということだ。

ここは名古屋市内のビルにある、とある会議室。「猫町倶楽部」が開催する読書会「名古屋アウトプット勉強会」の会場だ。取材当日の参加者はなんと約90人。その誰もが同じ本を読み、その本について語るためにここに集った。

「おもしろい本を読んだのに、その感想を家庭や職場で語れないことを残念に感じた経験はありませんか?」好きな本や読んだ本のことを思いっきり話したいという人は意外に多いと思うんです。それに、ものすごく感動した本でも1



2週間も経てばその内容を忘れていきますよね。だけど、その感動を言語化して語り合える人がいると、そう簡単に忘れなくなる。どうせ読むなら、自分の中に深く落としこみたいじゃないですか」

そう話すのは主宰者の山本多津也さん。もともと読書好きだった山本さんは、友人から「どんな本を読んだらいいか」と相談を持ちかけられたのを機に、2006年に仲間4人と気軽な読書会をスタートさせた。回を重ねるごとに、知り合いが知り合いを呼んで参加人数が少しずつ増加。20人ほどになった頃、連絡事項をスムーズに伝えるためにSNS「mixi」を利用したところ、見知らぬ人からの問い合わせが一気に増えた。「予想もなかったことなので驚きました。活字離れといわれる時



やまもと・たつや
1965年、愛知県日進市生まれ。06年から読書会コミュニティ「猫町倶楽部」を主宰。人文・ビジネス系の「アウトプット勉強会」、ドレスコードのある読書会「文学サロン月曜会」、アート・音楽系の「藝術部」などを名古屋・東京・京都で開催。http://www.nekomachi-club.com/

も多いんです」と山本さんはつけ加える。

本が好きという共通項に加え、意見交換を通じて他者の視点や価値観にふれるため、「友達が増える」こともこの会ならではの貴重な副産物。「他の日に開催している文学や芸術の読書会すべてに出席したり、食事会やバーベキューなど会員の企画による「課外活動」に参加したり、この会が生活のど

真ん中にあるという人も少なくありません」

人と人とのつながりが生まれ、ここに来れば思いを語り合える仲間がいる。もはや読書会という枠にはとどまらない、一つのコミュニティ。ちなみに、これまで計12組ものカップルがゴールインしたそう。

現在、会の運営は主宰者の山本さんと事務作業を担うボランティア

代でも本好きな人は一定数はいる。そう感じて、誰もが参加しやすい会になるよう体制を整えることにしたんです」

以降も参加希望者は増え続け、08年には会員が500人を突破。本好きのボランティアスタッフとともに会を運営し、開催場所は東京や京都へも広がった。12年7月現在、参加者数は延べ6500人に達し、一度の読書会で100人前後が集まる日本最大級の読書会へと成長した。

汗かく読書。強制力ある読書会だからこそ、ハードな本も読み切れる

午後7時15分に始まった読書会。各テーブルでは和気あいあいと、しだいに課題本についての議論が熱くなっていく。「自分の好きな本を紹介し合う紹介型読書会は他にもあるけれど、一つの作品を多くの人で掘り下げられる課題本の読書会はなかなかない」同じ作品を読んでも、感じることは十人十色。みんなで意見を交わすことで多様な視点を知ることができるのは楽しいし、新たな気づきをもたらせる」と、参加者はこの会の魅力をそう語る。

誰もが話しやすい環境をつくるため、グループ分けの際にはベテラン参加者と初参加者をバランスよく配し、複数回参加している人を進行役に立てる。また、「mixi」

アスタツフで行っている。寝る時や休日や削りながら本を読み、その多くの定例会に顔を出す山本さん。芸術や映画に特化した会も誕生したが、さらに各地に広がっていきたくも話す。

「大変だけれどよく聞かれるのですが、大変だったらやめてます(笑)。僕自身も楽しいから続けられているんですよ。会を大きくしたいからではなく、この楽しさを多くの人に知ってほしいから、いろんな地域にこの読書会を広げていきたい。僕の本業は住宅リフォーム業なのですが、いつか本の好きな人たちがともに暮らすシェアハウスをつくるのも夢の一つです。本が好きという共通点をもつ人たちが一緒に住んで、本棚がたくさんあるリビングで本について語り合う……。そんな暮らし方もありだと思っんです」

④(松岡理絵)

本の本 あなたを誘惑する本のガイドブックたち

「打ちのめされるようなすこい本」

米原万里著/文藝春秋(2400円)



ロシア語の同時通訳者として活躍した著者の、読書日記と書評を集めた怒濤のような本。「文字の一行一行が、箴言的に、格言的に屹立している」と解説の井上ひさし。深い造詣と相まって、旧ソ連・ロシアの現代史も垣間見える。

「塩一トンの読書」

須賀敦子著/河出書房新社(1260円)



イタリア文学の翻訳者である著者の澄みきった文章には、そこはかとない旅情が漂う。古典の精緻な解説、人生経験を凝縮して再読した本には新たな感慨が。題名には、読書という行為への限りない敬愛の念が込められる。

「そして、ねずみ女房は星を見た」

清水眞砂子著/テン・ブックス(1995円)



「子どもの文学は、人生は生きるに値することを伝えてくれる」大人が読みた子ども本

人が子どもの文学を読む楽しみに、登場する大人との対話がある」と語る著者が選んだ13冊。子どもの本を先に読んでから、この本で著者と対話するのもいい。

「世界を知る101冊」

海部雪男著/岩波書店(2100円)



多世界宇宙、心の起源、寿命論、水河期の「発見」、イワシと気候変動

……と読書欲をそそる書名が並ぶ。ほとんどが科学の本。天文学者の著者は言う。「人間が自然に対して何をしているのかわからなければ、人類の未来は闇」

「3・11後の思想家25」

大澤真幸編/左右社(2625円)



ルソー、ハナ・アレント、見田宗介など、3・11の出来事の意味について考える上で示唆に富むと思われる思想家25人。編者がそれぞれの仕事や著作に精通している研究者などに依頼してまとめた、思想家を紹介する一冊。⑤(編集部)

意味について考える上で示唆に富むと思われる思想家25人。編者がそれぞれの仕事や著作に精通している研究者などに依頼してまとめた、思想家を紹介する一冊。⑤(編集部)